
研究ノート

四国遍路体験記のリスト作成とタイトル分析*

大賀 睦 夫

はじめに

本稿は、遍路体験記から四国遍路の実態を明らかにするという研究の暫定的成果をとりまとめ、今後の研究課題を明確にしようとするものである。

四国遍路の研究には、宗教学的研究、歴史学的研究、地理学的研究、心理学的研究などいろいろなアプローチがあり、資料として歴史的文書、道標等の文化財、お遍路さんへのアンケート調査データ、研究者自身による遍路体験などいろいろな資料を用いた分析が行われてきた。しかし数多く出ている遍路体験記の分析は、重要な課題であるにもかかわらずあまり進んでいない。遍路体験記からは、遍路の現場の個々のできごとからお遍路さんの心理にいたるまで、遍路の詳細を知ることができる。体験記は四国遍路の実態を知る上で貴重な資料といえる。またそれは数多く出ているので、遍路の多様性を知ることにも役立つ。

しかし、遍路体験記の分析にも事例研究に伴う問題があることはたしかである。研究者が自分にとって都合のよい事例のみを取り上げるというバイアスが生じてくる可能性がある。また、個別の遍路体験をどこまで一般化できるかという問題もある。遍路体験記を書いた人がお遍路さんの代表というわけではないし、貴重な体験をした人がいても、多くの場合、手記は残されていない可能性が高いであろう。現在出ている遍路体験記は、統計学的にいえば偏った情報であることはたしかである。

*本稿の遍路体験記リスト作成と遍路体験記分析試論の執筆について、専門履修プログラム履修生の平田大稀さん、前田遥香さん、松下紗樹さんの協力を得た。

しかし、それでも遍路に関する貴重な報告であることはまちがいない。マイナス面を極小化するような方法で遍路体験記を分析できれば遍路の実態解明に役立つであろう。

遍路体験記の分析に伴う問題点について、われわれは次のように考える。自らの立てた仮説に反するようなデータにもできるだけ注意を払う。また、個別情報を不用意に一般化することがないように、遍路情報に偏りがあることを常に意識しておく。そして、できるだけ多くの体験記にあたってみることが必要だと思う。そこで本研究は、まず、これまでどのような遍路体験記が出版されてきたか、その全体像を把握することから始めることにしたい。そのためのリストづくりが最初の仕事になる。

1. 遍路体験記リストづくり

遍路体験記のリストづくりのために、国会図書館、香川県立図書館、高松市図書館に所蔵されている遍路関係書を検索し、遍路体験記を取り出した。最近では電子書籍のみの出版も行われているので、アマゾンで検索し Kindle で出ている遍路体験記も追加した。それが後掲のリストである。

遍路体験記としては、『日本巡礼記集成』第一集（1985年）、第二集（1987年）があり、これらには合わせて260編の遍路体験記が掲載されている。これらは多数のお遍路さんの体験記集であり、個人体験記とは異なるので、本稿ではリストの最後に別枠で掲載している。『日本巡礼記集成』は、主として『弘法大師空海』の購読者を中心に投稿を呼びかけたものなので、比較的信仰心の篤い人たちが執筆しているという特徴がある。これに対し、一般の遍路体験記は宗教にほとんど関心がないという人が多く執筆している。そのような点を考慮して比較してみると興味深いかもしれないが、これは今後の課題である。

本稿にとりあげた遍路体験記は216冊であるが、われわれはこれらを次のように並べている。まず、体験記を男性著者グループと女性著者グループに分けた。そして各グループ内で出版年順に並べた。男女別に分けたのは、男性と女性のお遍路さんの比較という視点に意味があると考えたからである。出版年順に並べたのは、四国遍路体験記の経年変化を見てみたいと思うからである。

われわれの遍路観察によると、一般的に言って、男性のお遍路さんは遍路に修行的性格を求める傾向が強く、女性のお遍路さんは出会いを楽しむなど情愛面を重視しているように思われる。男性グループと女性グループに分けることによって、遍路体験記のタイトルにそのような傾向が見られるのかどうか確認してみたい。

しかしながら、われわれがより関心をもっているのは、正確にいうと、男女の違いというより、男性性と女性性の違いである。男性性・女性性とは、生物学的概念ではなく、心の中にだれもが共通に抱いているイメージであり、ユング心理学でいうところの元型である⁽¹⁾。洋の東西を問わず、人格形成の目標は男性性と女性性の統合とされているので、四国遍路がこれら男性性・女性性の獲得にいかに関与するのかという視点で遍路体験記を分析すると有意義であると考ええる。

男性性の特徴として、膨張的、先鋭的、積極的、競合的、合理的、分析的、意識的、知性的などがあり、女性性の特徴として収縮的、保守的、反応的、協力的、直感的、統合的、無意識的、意志的などがある⁽²⁾。遍路には男性的要素と女性的要素があるので、あるお遍路さんは、遍路の男性性に心ひかれる。別のお遍路さんは、遍路の女性性に心ひかれる。そして出版する体験記のタイトル、サブタイトルに自らの体験のエッセンスを記す。こうしてお遍路さんの遍路観が体験記のタイトルにも反映することになる。たとえば、遍路の男性性にひかれる人の本のタイトルには、『男は遍路に立ち向かえ 歩き遍路四十二日間の挑戦』がある。反対に、遍路の女性性にひかれる人の本のタイトルには、『四国遍路体験記 大悲の御手に抱かれて』がある。前者では遍路は挑戦であり、厳しい修行の世界である。後者においては、遍路で体験するのは仏の愛であり、癒しである。遍路の印象は人によってかなり異なるものであるらし

(1) E・ノイマンは次のように述べている。「われわれがある段階・祭礼・人格において女性的因子あるいは男性的因子が優勢であると言うときには、あくまで心理学的な発言をしているのであって、生物学的意味にも社会的意味にも還元されてはならない。「男性的」・「女性的」というシンボル体系は、元型的・超個人的であり、それらがさまざまな文化において「男性的」または「女性的」な性質を持つとされる個人に投影されているのは誤りである」(林道義訳『意識の起源史』上、紀伊国屋書店、1984年、26ページ)。われわれはこのような用法に従っている。

(2) これはF・カブラ『新ターニングポイント』工作舎、1995年、30ページの陰陽のリストを基に、われわれが考える男性性・女性性の要素をつけ加えたものである。

い。以上をふまえ、遍路体験記を男性的タイトルと女性的タイトルのいずれかに分類してみた。もちろん『四国遍路日記』のように、どちらにも分類できないものも多い。後掲のリストでは、男性的タイトルの前に○を、女性的タイトルの前に●を付している。

2. 遍路体験記タイトルリストの分析

本稿の目的は、遍路について結論めいたことを言うのではなく、むしろ遍路に関する問題・課題の発見にある。そこで、作成した遍路体験記リストからどのような遍路研究についてのヒントや仮説が得られるか考えてみたい。

前述した男性と女性の違いについては、どのようなことがいえるだろうか。まず、遍路体験記を出版しているのは圧倒的に男性であることがわかる。男性の方が書くことを好むようである。次に、男性的タイトルをつけているのはすべて男性であることがわかる。しかし男性の中にも女性的タイトルをつけている人がたくさんいる。女性のお遍路さんのタイトルには男性的なものはない。男女を問わず、全体として遍路体験記にはどちらかというとな女性的タイトルをつけるお遍路さんが多い。遍路には男性的要素と女性的要素があるが、遍路体験記からいえることは、多くの人が女性的要素にひかれて遍路に出かけている可能性があるということである。このような女性的タイトルの体験記が登場してくるのは1990年代以降なので、少なくとも近年においては、そうした傾向があるといえるのではないだろうか。そのさらなる検証は今後の課題としたい。

次に、遍路体験記の経年変化を見てみたい。昔は遍路体験記が出版されることはまれだった。体験記のタイトルも『お遍路』『遍路日記』『四国遍路記』などのように地味でシンプルなものであった。著者の思いを込めたタイトルをつけた体験記が出てくるのは1990年代以降で、そのきっかけになったのは、1990年の小林淳宏『定年からは同行二人』だったようである。これ以降、『心の詩 四国もみじ遍路ひとり歩き』『四国遍路紀行 札所めぐりで“生きる知恵”を学ぶ』など、思い思いのタイトルをつけた体験記が出版されるようになった。

90年代以降このような体験記がたくさん登場するようになった理由は何だろうか。

冷戦の終焉、バブル経済の破綻、リストラ（従業員解雇）の急増など、日本国民の意識を変化させる大きな事件があったからだろうか。歩き遍路という古い遍路のスタイルが復活したからだろうか。あるいは出版事情も変化して個人で本を出すことが比較的容易になったからだろうか。いろいろな仮説が考えられるが、その検証も今後の課題にしたい。

四国遍路は同行二人といわれるように、一人で歩くことが基本であるように思われるが、遍路体験記リストをみると、夫婦による遍路体験記が意外に多い。『お遍路は大師さまと三人旅 歩いて見つけた夫婦の絆』『空と海と風と 夫婦で愉しむ道草遍路』『夫婦で行く素晴らしき歩き遍路 自分探しの夫婦お遍路さん体験記』『夫婦で歩く遍路道』『夫婦お遍路』『夫婦遍路紀行』『風と歩いた夫婦の四国遍路』『二百万歩のほとけ道 熟年夫婦が歩いた四国遍路』などのタイトルが並んでいる。以上から、現在のお遍路さんの間に、四国遍路をとおして理想の夫婦関係を築くというテーマがあることがわかる。これに加えて、『巡礼日記 亡き妻と歩いた 600 キロ』『お父さんと一緒に四国遍路』『へんろ長調のぼり坂』など、配偶者を亡くした悲しみからいかに立ち直っていったかというテーマの体験記が多数ある。これらも夫婦関係を扱ったものと広く考えると、夫婦関係は遍路の非常に大きなテーマであることがわかる。

お遍路さんは圧倒的に高齢者が多い。遍路体験記のタイトルにも「還暦」「定年」「熟年」「後期高齢者」「喜寿」「傘寿」などのことばが並んでいる。他方、『15歳のお遍路 元不登校児が歩いた四国八十八カ所』など、若者によるお遍路体験記も出ている。若者と高齢者の人生での課題は異なる。若い時は男性性を身につける時期、人生の後半は女性性を身につける時期ともいわれる⁽³⁾。では実際に、若者、高齢者は、それぞれ遍路から何を得ているのだろうか。遍路体験記をとおして確認してみたい。

近年は外国語によるブログなどで遍路が世界に情報発信されており、外国人遍路も増加している。日本語訳はまだ少ないが、外国人によるお遍路体験記もある。筆者も歩き遍路でたくさんの外国人遍路に出会ったが、その多くが四国の自然や日本文化に

(3) E・ノイマン『女性の深層』紀伊国屋書店、1980年、66・67ページ参照。

非常に好意的な評価をしていた。外国人には遍路というとりわけ日本の文化がどのように見えているのか。これはたいへん興味深い課題である。

最後に、信仰心をもっているお遍路さんとそうでないお遍路さんの遍路体験を比較することも非常に意味のある課題だと思う。四国四転説⁽⁴⁾が流布しているように、理想的には遍路の目的となっているのは人格形成である。その意味で、宗教的教えを常に心に抱いて歩いている人とそうでない人とは、同じ遍路体験から得られるものもずいぶん違うのではないだろうか。たとえば、十善戒を自らの血肉にしようと絶え間なく努力して歩いている人と、単なるスポーツ感覚で遍路をしている人とはまったく異なった遍路体験になるであろう。遍路体験記リストを見ると、1990年より以前の遍路体験記にはまだ宗教性が感じられるが、1990年以降はあまり宗教性が感じられない体験記が多いように思われる。遍路から次第に宗教性が失われてきているのではないかと思わざるをえない。とはいえ、近藤優『四国遍路托鉢野宿旅 お大師様と二人連れ』や手塚妙絹さんの本など信仰心に篤い人たちの体験記もあるので、それらと宗教性の少ない体験記との比較を今後行いたいと思う。

3. 遍路体験記の分析試論

これまで、遍路体験記リストからいろいろな遍路に関する研究テーマを見いだしてきた。それらのテーマに関わる体験記を読んで分析する仕事が今後の課題であり、それは稿を改めて論じることになるが、ここで試論的に、三つのテーマを選んで以下に論じてみることにした。

(1) 若者遍路

『15歳の「お遍路」元不登校児が歩いた四国八十八カ所』『サンダル遍路旅日記』『僕が遍路になった理由』の三冊を比較してみる。

『15歳の「お遍路」』では、著者は自分探しと家族の病気が治るようお願いするためにお遍路に行き、答えは出なかったが、前向きになり、後に夢を見つけることが出

(4) 阿波、土佐、伊予、讃岐の四つの国を発心、修行、菩提、涅槃に相当させる考え。

来た。『サンダル遍路旅日記』では自分が本当にしたいことが何なのかわからなくなり、仕事を辞める。そして、以前途中で投げ出した遍路旅を思い出し、完遂すれば何か得られるのではないかと考え、お遍路に行く。そして、自分らしい生き方をしようと納得のできる答えが出せた。『僕が遍路になった理由』では、当然のように就職活動をし、社会人になるという社会の流れに疑問を感じ、夢や希望はなかったが、とにかく何かやろうと思いつき、お遍路することにした。そして、進路は決められなかったが、自分を好きになり自分なりに生きていこうと思えるようになった。

これらを踏まえると、若者遍路の特徴として、目的や夢を見つける為にお遍路に行くことが多いようだ。そして、見つけることはできなくても考え方が前向きになっている。また、若いのにえらいねと声をかけられるという体験も沢山見受けられた。さらに、はじめはお接待に少し抵抗があったが、次第にありがたく受けるようになるというのも特徴のひとつのようである。

(2) 熟年遍路

『定年からは同行二人』『退職したらお遍路に行こう』の二冊を読み、熟年の遍路者の特徴を考察した。両者とも定年退職したお遍路さんである。定年退職後に遍路を始める人は少なくない。その理由としては、お金・時間に余裕ができたことによって、今までできなかったことをしたい、新しいことに挑戦したいなどが挙げられる。熟年遍路者の特徴は、四国遍路を修行の場として考えていることである。徳島・高知・愛媛・香川は、それぞれ発心・修行・菩提・涅槃の道場とされており、若者の遍路者よりもそれを意識しながら歩くという印象を受けた。そして、修行の場と捉えていることもあり、「禁酒禁煙」「必ず歩き通す」などの目標を掲げ、厳守している。もう一つの特徴としては、道中・宿・自身の体に関する記述が多いことだ。さらに面白いことに、これら二冊の本は1990年出版のものと2007年出版のものであり、道中の様子、他の遍路者や宿の状況が大きく変化したことがわかる。2000年頃から「お遍路ブーム」があり、二冊の間で社会状況が大きく変わったのだ。バブル崩壊なども関係しているであろうし、今後も日本経済などの背景も考慮しつつ遍路についてさらに調べたい。

(3) 外国人遍路について

『四国八十八か所ガイジン夏遍路』『フランスからお遍路に来ました。』の二冊から外国人遍路の特徴を考えてみる。

一番印象深いことは、外国人は「お遍路はこうでなければいけない」といった考えを強く持っている点であるように思われる。外国人の共通点としては、事前に計画しすぎないことや美の景観を大事にしていること、さらなる達成・内的成長へ向かうために歩いていることが挙げられる。一方で外国人遍路者の中での男性と女性の違いとしては、男性が女性よりもプライドが高いこと、女性は一日一日の人とのつながりを男性よりも大事にすること、女性は日本文化にたくさん触れて、魅力や良さについて多く語っていることなどが挙げられる。日本人と比較してみた場合、他国の文化と自国の文化の違いを見つけ、違いを認めるといった考えを持っている点は、外国人ならではの点と思われた。一方で出会う人に親しみを感じ、一回出会った人に再び出会うと嬉しい感情がこみ上げる、お遍路中に「なぜお遍路しているか」などについて自問自答をする、自分と他者の違いに向き合うといった点は日本人遍路者と共通している部分であると考えられる。

おわりに

本稿の主要な目的は、遍路体験記のリストをつくること、そしてそこから遍路に関する研究課題を見いだすことであった。実際に体験記のリストをつくり、そのタイトルを眺めるところから、いろいろな疑問が湧いてきて研究課題を見いだすことができた。「3. 遍路体験記の分析試論」は、取り扱った本が少ないので確定的なことは言えないが、そこに記した特徴は今後の議論の出発点になるであろう。本稿執筆をきっかけにさらに研究を進めていきたい。

表. 四国遍路体験記リスト

(○: 男性的タイトル, ●: 女性的タイトル)

【男性著者】

著者名	書名	出版社	出版年
荻原井泉水	遍路日記	婦女界社	1941
橋本徹馬	四国遍路記	紫雲荘出版部	1950
和田性海	聖跡を慕うて	高野山出版社	1951
橋本徹馬	四國遍路記	紫雲荘出版部	1956
鍵田忠三郎	遍路日記 乞食脚三百里	協同出版	1962
土佐文雄	同行二人 四国霊場へんろ記	高知新聞社	1972
宮崎忍勝	四国遍路日記	大東出版社	1977
畑山利馬	四国遍路 四国八十八カ所巡拝記	畑山利馬	1978
有園幸生	お遍路	毎日新聞社	1982
村上護	遍路まんだら 空海と四国巡礼を歩く	佼成出版社	1986
井上拓歩	石摺遍路 四国霊場・拓の旅	高知新聞社	1987
松原哲明	巡礼・遍路 共に歩む	集英社	1987
西村望	西村望の四国遍路の旅	徳間書店	1987
三沢菊雄	四国遍路の足跡を尋ねて	けやき出版	1988
小林淳宏	定年からは同行二人	PHP 研究所	1990
有園幸生	お遍路	毎日新聞社	1992
古藤高良	行歩曼荼羅四国八十八カ所徒歩遍路	雪書房	1994
喜久本朝正	四国歩き遍路の記 法服を白衣に替えて	新風書房	1994
村岡空	○ へんろ道 四国遍路修行記	香川県立図書館	1995
和田明彦	○ 曼荼羅の旅 現代に生きる四国遍路の知恵	近代文芸社	1996
植松辰美	祈りと自然理学博士の遍路紀行 四国 88 カ所を訪ねて	四国新聞社	1996
武藤暢夫	四国歩き遍路の旅 定年三百万歩の再出発	MBC 21	1996
松坂義晃	空海の残した道 現代歩き遍路がそこに見たもの	新風舎	1997
白神忠志	お遍路 歩いた四国八十八カ所四十二日の記録	洋々社	1997
林大斐	● 心の詩四国もみじ遍路ひとり歩き	文芸社	1997
武田喜治	○ 四国遍路紀行 札所めぐりで“生きる知恵”を学ぶ	武田喜治	1998
上林三郎	定年遍路記	文藝書房	1998
西川阿羅漢	歩く四国遍路千二百キロ ある定年退職者の 31 日の旅	現代書館	1999
潮見英幸	サンダル遍路旅日記	文芸社	1999
ひろたみつを	四国・お遍路謎とき散歩 信仰と巡礼の大地を訪ねて	広済堂出版	1999
寺田一清	四国遍路道中記 へんろとは一歩一歩のこの一歩	不尽叢書刊行会	1999
高見貞徳	○ 四国霊場巡り歩き遍路の世界 小企業経営者は歩きながら何を考えたか	文芸社	1999
藤井玄吉	玄さんの四国八十八カ所遍路日記	文芸社	2000
北勲	空海の風にのって 中年自転車四国遍路のススメ	求竜堂	2000
後藤大	● 風の吹くまま 四国遍路記	文芸社	2000
岡崎朝彰	● 感謝の心に洗われる道 四国八十八カ所お遍路の旅	郁朋社	2000
宇野恭夫	お四国四国霊場八十八カ所歩き遍路の記録	文芸社	2000

クレイグ・マクラクラン	四国八十八か所ガイジン夏廻路	小学館	2000
財津定行	お廻路は大師さまと三人旅 歩いて見つけた夫婦の絆	リヨン社	2000
馬淵公介	きょうはお廻路日和	双葉社	2001
辰濃和男	四国廻路	岩波書店	2001
高橋憲吾	● 空と海と風と 夫婦で愉しむ道草廻路 前編	文芸社	2001
寺門修	「百八十五万歩」と旅 四国八十八寺歩き廻路	文芸社	2001
木下和彦	● ゆっくりのんびりお四国さん 退職後の生き方を探す旅	文芸社	2001
庭野隆雄	四国廻路：六十五歳から四国八十八札所千四百キロ歩いた記録	自分流文庫	2001
景山弘	歩き廻路の記：四国八十八か所：七十二歳「第二の定年」からの出発	景山弘	2001
堀之内芳郎	喜寿の廻路日記 同行二人四国八十八か所巡礼	朱鳥社	2002
小野田隆	風と尺八廻路旅	MBC 21	2002
横山良一	お四国さんの快樂	講談社	2002
小野庄一	四国霊場徒歩廻路	中央公論新社	2002
石山未巳	● 幸せはどこにある 白血病を宝に変えた歩き廻路	新風舎	2002
濱田義榮	四国歩き廻路道中記	文芸社	2002
菅信	四国八十八ヶ所歩き廻路の旅	日本科学者会議運輸研究機関分会	2002
阿久津鯨六	大雪（たいせつ）越えて、四国廻路歩き旅	文芸社	2002
山田清史	● 温もりいっぱい同行二人 四国八十八か所廻路	近代文芸社	2002
田口隆二	山屋の歩いた廻路道 四国霊場巡礼	文芸社	2002
川端竜子	川端竜子四国廻路 詠んで描いて	小学館	2002
築山良文	四国廻路紀行	文芸社	2003
松山巖	くるーりくるくる	幻戯書房	2003
小林キユウ	Rout 88：四国廻路青春巡礼	河出書房新社	2003
尾上昭	選暦お廻路旅日記	新風舎	2004
吉田哲朗	ぐうたらじじいのお廻路日記四国霊場八十八か所巡り 1200 キロ通し打ち	熊本日日新聞	2004
大坪忠義	感動の四国廻路 真夏の二三〇〇キロ通し打ち	海鳥社	2004
青木勝洋	お廻路さんになる	産経新聞ニュースサービス	2004
近藤優	四国廻路托鉢野宿旅 お大師さまと二人連れ	文芸社	2004
秋元海十	88の祈り 四国歩き廻路 1400 キロの旅	東京書籍	2004
金子正彦	四国お廻路旅物語 風とともにひたすらに	文芸社	2004
大谷唱二	● 四国八十八ヶ所廻路 ふれあいの旅路	文芸社	2004
杉浦孝宣	○ 強く生きろ ある学習塾長の四国廻路の旅	学びリンク	2004
金澤良彦	夫婦で行く素晴らしき歩き廻路 自分探しの夫婦お廻路さん体験記	ユニプラン	2004
武田喜治	○ 廻路で学ぶ生きる知恵 四国八十八か所めぐり	小学館スクエア	2004
青野貴芳	四国巡礼葛藤記：駆け出し僧侶が歩いた四国八十八か所	鈴木出版	2004
種村直樹	気まぐれ列車で行こう瀬戸内・四国スローお廻路	実業之日本社	2005
津田文平	お廻路さんと呼ばれて 四国一二〇〇キロ歩き旅	東洋出版	2005

村上清宣	俺は旅人テクテクテク・もうひとつの歩き遍路	朝日園	2005
高久ひとし	へんろ長調のぼり坂	文芸社	2005
中谷勝春	● この世はご縁の世界 四国八十八カ所遍路の記	文芸社	2005
池田鉄郎	● 青い空と海、そしてビールな日々 50日間歩き遍路涙と手紙の旅	郁朋社	2005
加藤弘昭	四国一〇八ヶ所遍路旅	新風舎	2005
岡田光永	15歳の「お遍路」元不登校児が歩いた四国八十八カ所	広済堂出版	2005
山内清史	● 光と風の道 四国八十八カ所歩き遍路記	文芸社	2005
森谷茂	● ゆっくり遍路同行二人 四国八十八カ所霊場	文芸社	2005
須藤元氣	幸福論	ネコ・パブリッシング	2005
川村憲祐	同行二人に百万歩の旅	川村憲祐	2005
金子哲也	白い道標：遍路日記	金子哲也	2005
鈴木睦男	四国札所巡りすまの記	文芸社	2005
金子忠司	四角い四国を歩いて廻ればまるくなる：遍路体験記	宝塚出版	2005
辰濃和男	歩き遍路	海竜社	2006
後藤典重	歩き遍路の独り言 四国八十八箇寺遍路旅	新ハイキング社	2006
今西広	● 一期一会歩き遍路一人旅 四国八十八カ所	新風舎	2006
笠井信雄	お四国夢遍路 奥の院巡るが旅の真骨頂	光光編集	2006
中塚晴夫	● 四国お遍路さんふれあいの歩き旅	牧歌舎	2006
武石伊嗣	四国八十八カ所遍路旅日記	神谷書房	2006
澁田保磨	四国遍路道中記	梓書院	2006
金田正	● 四国は心のホスピタル 遍路の旅で見えてきたもの	新風舎	2006
杉本隆文	新米僧侶のオキラク遍路の旅	牧歌舎	2006
今村昭男	● 旅は道連れ世は情 四国歩き遍路 ざんげと報恩 謝徳の旅紀行 上巻	埼玉ホワイトサービス	2006
吉田正孝	ひょいと四国のお遍路へ 千二百キロの歩き旅	現代書館	2006
吉武宏明	夫婦で歩く遍路道	吉武宏明	2006
佐野恒夫	遍路とは歩くことなり 私の歩いたお四国さん	遊人工房	2006
辰濃和男	● 歩き遍路 土を踏み風に祈る。それだけでいい。	海竜社	2006
加賀山耕一	お遍路さん 美人をたずねて三百里	平凡社	2006
伊勢正	四国遍路の記 第二版	伊勢正	2006
稲木凡庸	遍路安単：四国巡礼の旅にて	新風舎	2006
山中斎	壺中の天地：四国歩き遍路紀行	創栄出版	2006
大野栄松	紀行四国遍路	文芸社	2007
永田龍二	お遍路さん旅日記四国八十八カ所	高城書房	2007
室達朗	● 心の器四国遍路	電気書院	2007
斉藤知白	お遍路さん 俳諧行脚	慧文社	2007
大野正義	これがほんまの四国遍路	講談社	2007
岡島庸晶	○ 遍路体験記 遍路から得た知恵	リフレ出版	2007
仲川忠道	退職したらお遍路に行こう	星雲社	2007
西條一彦	四国八十八カ所歩き遍路ふれあいの旅	せせらぎ出版	2007
清益実	● 四国遍路記 四国の風に誘われて	近代文芸社	2007

藤原武弘	巡礼 四国遍路を中心とした巡礼行動の経験的価値	藤原武弘	2007
玉井清弘	時計回りの遊行 歌人のゆく四国遍路	本阿弥書店	2007
竹屋敷康誠	● のんびりてくてく四国八十八か所巡拝ノート	創芸社	2007
三輪敏広	夫婦お遍路 上 Mutsumi books	春風社	2007
三輪敏広	夫婦お遍路 下 Mutsumi books	春風社	2007
加藤澄男	八十歳からの四国遍路	加藤澄男	2007
中塚昭夫	● 四国遍路：気づきと癒しの旅	新風舎	2007
加藤祐策	夏蟲遍路：四国六十四日の旅	加藤祐策	2007
五十崎洋一	団塊親父四国を歩く 四国八十八か所歩き遍路物語 我慢発見ふれあいの旅さ	第一印刷	2008
藤田健次郎	夫婦へんろ紀行	東方出版	2008
本田亮	ママチャリお遍路 1200 km	小学館	2008
車谷長吉	四国八十八ヶ所感情巡礼	文芸春秋	2008
城石裕一	同行二人 四国八十八ヶ所歩き遍路紀行	海鳥社	2008
石川文洋	四国八十八ヶ所 わたしの遍路旅 岩波新書	岩波新書	2008
高橋憲吾	● 空と海と風と 夫婦で愉しむ道草遍路 後編	文芸社	2008
鈴木昭一	● 風と歩いた夫婦の四国遍路	ビレッジプレス	2009
早坂隆	僕が遍路になった理由	連合出版	2009
森哲志	○ 男は遍路に立ち向かえ 歩き遍路四十二日間の挑戦	長崎出版	2009
有田秀穂	歩けば脳が活性化する お遍路さんは何故歩くのか？	ワック	2009
横田賢一	風と歩けば続四国霊場四季暦	山陽新聞社	2010
菅卓二	四国遍路道ひとり旅	論創社	2011
藤江彰彦	○ 生きることは歩くこと 歩くことが生きること	幻冬舎ルネッサンス	2011
杉山邦夫	七十一歳からの歩き遍路記録	文芸社	2011
佐藤四郎	四国お遍路走り旅	幻冬舎ルネッサンス	2011
小西敏明	● ゆっくり歩いてめぐり合う 88の感動物語〈四国お遍路〉	すばる舎リンケージ	2011
空冒	わが歩き遍路 古稀の日の結願を目指して	文芸社	2011
山勝三	二百万歩のほとけ道 熟年夫婦が歩いた四国遍路	文芸社	2012
アルフレート・ボナー	同行二人の遍路 四国八十八ヶ所霊場	大法輪閣	2012
金谷常平	ひょいと四国へ 番外霊場を巡ってこそ遍路の醍醐味	上毛新聞社事務局出版部	2012
牟田和男	お遍路日記	海鳥社	2012
和田岳晴	● 風に吹かれて遍路道	青柿堂	2012
土肥清茂	○ 悟りへの道程 私の四国遍路 愛しい千紘よ	美巧社	2012
高木亀一	88歳で「四国88カ所遍路の旅」30日間の記録	文芸社	2012
西田久光	歩きへんろ夫婦旅：身も心もダイエットてくてく 1200キロ	ブイツーソリューション	2012
西川阿羅漢	傘寿の四国遍路	風詠社	2013
神崎紫峰	ヨタヨタ爺っつあん 66歳 自転車と歩きの遍路旅 50日	Kindle	2013
月谷好純	なぜ歩く 四国八十八か所お遍路記	Kindle	2013
五反田正宏	● 四国遍路体験記 大悲の御手に抱かれて	デザインエッグ社	2014
大西良空			

宮田珠己	だいたい四国八十八カ所	集英社文庫	2014
佐藤久光	巡拝記にみる四国遍路	朱鷺書房	2014
平維茂	逆打ち	Kindle	2014
増田英俊	○ 激闘歩き遍路体験記	増田英俊	2014
北端辰昭	空海の史跡を尋ねて：四国遍路ひとり歩き・同行二人	北端辰昭	2014
菅直人	総理とお遍路	角川新書	2015
新川秀之	冬のお遍路さん：四国一周 49 日歩き旅	Kindle	2015
阿部清澄	金剛杖四国遍路記	阿部清澄	2015
武田喜治	四国歩き遍路 気づきと感謝の旅	大法輪閣	2015
渡辺豊	● にわか遍路お四国に行くお接待の心と一期一会の旅	創栄出版	2015
松尾紀隆	お遍路からヒマラヤへ	岐阜新聞社	2016
狭間秀夫	後期高齢者四国遍路を歩いてみれば	風詠社	2016
あいちあきら	へんろみち お四国遍路だより	編集工房ノア	2016
桂木正則	● 山と海と風と潮 四国八十八カ所歩き遍路旅	ミヤオビパブリッシング	2016
垣添忠生	● 巡礼日記 亡き妻と歩いた 600 キロ	中央公論新社	2016
井上サトシ	四国遍路激走 1227 km 一人旅	Kindle	2016
岩田憲治、 岩田文子	マラソン大好き、じいじ&ばあばの走り遍路事始め	Kindle	2016
三岳晋	四国遍路：ひとり歩き旅	三岳出版	2016

【女性著者】

著者名	書名	出版社	出版年
高群逸枝	お遍路	厚生閣	1938
西端さかえ	四国八十八札所遍路記	大法輪閣	1964
今井美沙子	● 親子遍路旅日記	東方出版	1981
柳原和子	夢遍路	告星社	1986
高群逸枝	お遍路	中央公論社	1987
手束妙絹	人生は路上にあり お大師さまへの道	愛媛県文化振興財団	1988
手束妙絹	● お遍路でめぐりあった人びと	リオン社	1988
西岡寿美子	四国おんな遍路記	新人物往来社	1988
田崎筐子	娘遍路	葦書房	1991
時実新子	時実新子のじぐぐぐ遍路	朝日新聞社	1991
手束妙絹	● 花へんろ一番札所から	俊成出版社	1994
白滝まゆみ	虹がゆく	邑書林	1994
佐藤孝子	情け嬉しやお遍路ワールド 歩いて歩いて四国の風になった	近代文芸社	1996
藤沢真理子	● 風の祈り 四国遍路とボランティア風ブックス	創風社出版	1997
佐藤孝子	● お遍路に咲く花通る風 元氣おばさんお四国を歩く	リオン社	1997
おかざききょうこ	● おへんろ出会い旅 四国路 1400 キロひとりっきりの遍路紀行	コアラブックス	1997
榎本三知子	よみがえる旅 お四国の道千二百キロ	日本図書刊行会	1998
細谷昌子	詩国へんろ記 八十八カ所ひとり歩き七十三日の全記録	新評論	1999

高田京子	ある日突然、お遍路さん 四国八十八カ所めぐり	日本交通公社	2000
月岡祐紀子	平成娘巡礼記	文芸春秋	2002
佐藤孝子	● 四国遍路を歩く：もう一人の自分に会おう心の旅	日本文芸社	2002
平野恵理子	わたしも四国のお遍路さん	集英社	2002
江藤友子	女一人遍路道中記	文芸社	2003
諸井澄子	私の遍路日記：四国八十八カ所を歩く	そうぶん社出版	2003
菅原恵	歩きお遍路 千里の道も一歩から	同友館	2003
角川知寿子	すみちゃん四国遍路をゆく	飛鳥出版室	2003
高群逸枝	娘巡礼記	岩波書店	2004
桂道子	四国八十八カ所歩き遍路みちくさ日記	新風舎	2004
福島明子	● 大師の懐を歩く それぞれの遍路物語	風間書房	2004
杉浦詩奈	お遍路の奇跡	東方出版	2005
佐藤光代	私のお遍路日記 歩いて回る四国 88カ所	西日本出版社	2005
小山遥	お四国遍路の道 五七五命と祈り アボンブックス	美研インターナショナル	2006
阿部明子	四国を駆け抜けた男道楽斎天保元年『四国遍路連々唄』より	新風舎	2006
林道代	寄り道お遍路：兼好的旅遊日記	新風舎	2007
高田恭子	甲斐の国からお四国へ	文芸社	2007
高田京子	ニッポン最古巡礼 新潮新書	新潮社	2007
安田あつ子	● お父さんと一緒に四国遍路	文芸社	2008
竹内紘子	お遍路ウォーク	くもん出版	2008
冢田莊子	四国八十八ヶ所つなぎ遍路	KK ベストセラーズ	2009
四元奈生美	四国遍路に行ってきたマッシュ	PHP 研究所	2010
田中ひろみ	● ぶらりおへんろ旅 空海と仏像に会いにいく！	西日本出版社	2010
森知子	バツイチおへんろ	双葉社	2012
いとうあゆみ	お遍路小娘	Kindle	2013
梅田和江	● 愛と光の 62 日 開祖 1200 年記念四国お遍路旅日記	アルマ書房	2015
マリー=エディット・ラヴァル	フランスからお遍路に来ました。	イース・プレス	2016
高田京子	四国八十八カ所めぐり 同行二人。大師が開いた祈りの道へ	JTB パブリッシング	2016

【その他】

弘法大師空海刊行会	日本巡礼記集成 第一集	弘法大師空海刊行会	1985
弘法大師空海刊行会	日本巡礼記集成 第二集	弘法大師空海刊行会	1987